
日向の郵便屋さん

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日向の郵便屋さん

【Nコード】

N4085BA

【作者名】

Nerine

【あらすじ】

一匹の綺麗な郵便屋さんは、今日も2人の間を行き来します。2人の為だけの、2人の為に頑張る彼女は、彼等にとって大切な存在でした。彼女の願いはただ1つ。声を合わせて2人で呼んで。そうして、静かに眠りにつくのです。

アーモンド型でブルーとイエローのオッドアイの瞳。長い尾にスラリとした体、そしてシルバー・クラシック・トビーの美しい毛並み。

近所でも評判な美人猫の私は、今日も赤い首輪の鈴を鳴らしながら、2つの家を渡り歩くの。

尾をぴんと張り、凜とした姿勢で、誰も寄せ付けない高嶺の花として。そこらの雄猫なんて、相手にもしないわ。

だって私には、大切な人から任された大切なお仕事があるんだもの。

「よろしくね。引つ搔いたりしたらダメだよ？」

そう言われたのは、いつだったかしら。

暖かい陽気の、天気の良い日だったはず。

大切な人でありご主人でもあるその人は、突然私に仕事を与えたの。

お気に入り首輪には、白い紙。

ご主人は、猫の私からみても、とても儚い空気を纏っている人だった。毎日をベッドで過ごし、私もその部屋でご主人の横にいた。

勿論、外に出た事なんてなかったわ。

出ようと思ったことだってなかった。

なのに、ご主人は突然私を外に出したの。

とても、悲しかった。

私じゃ、ご主人の寂しさを埋められなかったんだもの。

ご主人は運命を信じて、私に手紙を届けるようお願いした。会ったこともない、知らない誰かに宛てた手紙。

始めは、すごく怖かった。

だって、なんだか大きな固まりがすごい速さで走ってたし、大嫌いな犬だって、沢山いた。

「車には気を付けてね？」

まったく、私が賢い子じゃなければどうなってたと思うの。そう、ご主人に腹を立てたりもした。

でも、それも最初だけ。

私は、しっかり役に立てたの。当然のことだけどね。

「あら？ 可愛い猫ちゃんね」

それは、本当に運命だった。私は今でも、そう思うわ。

丁度、可愛い家の窓辺に、白いひらひらしたものを追いかけて立ち入った時。そこに、その人はいた。

私の大切なご主人の大切な人。

運命の人。

「それはね、紋白蝶って言うのよ。可愛い猫ちゃん」

とても、とても良い匂いの人だった。

そして、ご主人と同じ位儚い空気を纏った人。

ここにくるまでの間、何度か首の手紙をとられそうになったけど、誰にも許さなかったのに。

この人には、読んでもらいたって思ってたわ。

だから、初めて自分から、ご主人以外の人に擦り寄ったの。

「とても、人懐っこいのね。ふふ、本当に可愛い」

冷たいのに温かい、そんな手だった。

この私が思わず喉を鳴らしてしまうくらい、気持ちよかったの。

「あら、これは手紙？」

そしてやっと、その手紙に気付いてくれた。

でも、始めは読もうとしてくれなかったわ。

だから必死に手紙を外して、啜えて差し出したの。

「……まあ」

その人は、読んでくれたわ。そしてとても嬉しそうに、慌てて紙とペンを用意して何かを書き始めた。

覗きこんでみたけど、私は猫だもの。勿論内容は分からなかった。

でも、達成感で一杯だったわ。
だって私は見事、ご主人の期待に応えられたんだもの。

そしてその日から、何度も何度も、私はご主人とその人の間を行ったり来たりした。

二人の嬉しそうな、楽しそうな顔が見たかったから。後、たまにもらえるご褒美の二ボシ欲しさもあったね。

次第に二人は手紙だけじゃなく、お花も私に託すようになったわ。鼻がむずむずしたり、歩きにくかったり、とても苦労したのよ。でも、一生懸命頑張ったわ。

ご主人は、たまに私にこう言っていたわね。

「キミのお陰で、僕は愛しい人と巡り合えたよ」

その感情は分からないけど、とても嬉しそうに笑っていたわ。でもやっぱり、どこか寂しそうだった。

「猫ちゃんのお陰で、最近は毎日楽しみなの。今日は来るかな？
って」

あの人も、そうだった。だから私は、二人がそうならないように願ったのよ。

寂しくないよう、儚さが消えるよう。

一生懸命。犬に吼えられても、子供に邪魔されても。

でもね、それも今日でお終いな。

私の仕事は、もうお終い。

だって、私の大切なご主人は、もういないから。
私に最後の手紙を託して、眠ってしまったから。

どうしてなのかしら。

私達は、終わりを悲しく思わないのに。
人と違って、それを怖く思ったりしないはずなのに。

なのに、とても悲しくて、寂しくなった。
でも、苦しくはないのよ。

だって、ご主人、とても嬉しそうだったもの。
もう撫でてくれないけど。おいでと言ってくれないけど。でも、
嬉しそうに笑ってた。

だから私は、絶対に、この最後の手紙を届けたい。
大切なご主人の、大切な人に。私にとっても大切になった、あの
人に。

そしてとうとう、あの人の家に着いた。いつもと変わらず窓辺に
はお花が咲いていて、白いカーテンが揺れていて。

「あら、猫ちゃん。また来てくれたのね」

そして、そう声を掛けてくれるはずだった。
でも、どうして　　どうして今日に限って、その声が聞こえない
の？

ほら、鈴は鳴らしているのよ？　この美しい毛並みで擦り寄って
いるの。

なのにどうして、ご主人みたいに動かないの？　なんで、いつも一人だったのに、今日はたくさんの方があなたを囲っているの？　どうして囲って、泣いているの？

ねえ、起きて。起きて、手紙を読んで。

ご主人の、最後の手紙。愛しいって言っていた、あなたに宛てた、あなただけが読んでいい手紙なのに。

「……猫？」

そんな時、見知らぬ人が私を抱き上げ、そして手紙と花に気付いてハッとしていた。

ご主人の大切な人の周りには、今まで私が届けた手紙が、まるで花びらみたいに添えられていたわ。

「そうか、君が娘の言っていた可愛らしい郵便屋さんか」

その男の人はそう言って、あの人の胸元にその手紙をそっと置いた。私が一生懸命運んだ、向日葵という花も一緒に。

あれから長い月日が経った。

あの人もご主人と同じ日、同じ暖かい日に旅立ったの。

結局、二人がどういうやり取りをしていたのかは分からない。どいう気持ちは抱いていたのかも、分からないわ。

でも、どうしてなのかしら。最後の手紙だけは、読めたのよ。誰も開かずに、あの人と一緒に燃えてしまった手紙。見なかったのに、分かったの。

二人は空の向こうで、会うことが出来たかしら。
私がするように、二人で顔を擦りあって、気持ちを確かめ合えたかしら。

私ももう数分で、二人の元に行くでしょう。

美しかった毛並みも、宝石みたいな瞳も、もう美しくはなくなっ
てしまつて。尾だつて、ぴんと上げることが出来なくなったもの。

私も、会えるかしら。会いたいの、とても。

ご主人が思つたように、私も二人に会いたいわ。

そして今度は、二人に抱かれてみたい。一人ずつじゃなく、二人
一緒に。

そしてまた、たまにでいいからお仕事をお願いして。

絶対に、届けるから。

二人の嬉しそうな顔と冷たいけど温かい手が、恋しいのよ。

だから、ね。

二人を想つて、眠ることにするわ。二人みたいに、私も。晴れや
かで喜ばしい気持ちで。

またいつの日か。今度は二人で笑つて、話しましょう。

この子の名前は、ソルテ。君と僕の、ソルテ。

声を合わせて、二人で呼んで。
ご主人が最後の最後で付けてくれた、大切な人に宛てた私の名
架け橋になった、その名を。

（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

他サイト様から移行してきた短編です。

恋愛だけど、恋愛じゃない感じなので、ジャンルは一応文学ということ。

今回のお花は向日葵。トルテちゃんは、虹の橋の向こうで、きっと2人に会えたことでしょう。

よければ、ご意見・ご感想・評価をお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4085ba/>

日向の郵便屋さん

2012年1月10日20時54分発行